

# 事業のタネシート

活動地域・団体名：一般社団法人MIT

事業名称：「トラヤマの杜」認定と多様な主体による森林づくりを促進するツシマモリト協同組合設立（仕組みづくり）

## あらすじ

対馬において、非経済林として林業分野で放置されている個人所有の森林を「ツシマモリト協同組合」が「トラヤマの杜」として認定し、多様な主体が組合員となって活動をそれぞれ展開することで、トラヤマの杜の生態系保全と持続可能な利用による生態系サービスの向上を実現し、人とヤマネコが共生するしまづくりを目指す。本事業は、そのための仕組みづくりを行う。「トラヤマの杜」は、日本ナショナルトラスト協会のトラスト地（保護区）にも登録し、保護区（コアゾーン・バッファゾーン）を増やしていくことで、将来的には対馬ユネスコエコパークの登録に向けた動きを作り出すとともに、国連や環境省が進める陸地の保護区の増設（30by30）に貢献する。全国の子非経済林・個人所有の放棄された森の付加価値化や森林生態系の保全と持続可能な利用におけるロールモデルとなる。

## ストーリー

対馬は、土地の89%が森林であり、ツシマヤマネコをはじめとする希少生物が生息している。しかし、近年は、森林と対馬での暮らしの関係性が希薄化し、林業事業者のみが森林を生業として利用しているのみとなり、有害鳥獣となったかつての天然記念物であるツシマジカの個体数の増加によって、森林の劣化が著しく、希少な動植物の好適な生息地がなくなっている。また、森林が劣化したことで、生態系サービスが低下し、土砂の流出や倒木などによる災害や磯焼けの原因にもなっており、対馬の暮らしや基幹産業である水産業にも深刻な影響を与えている。対馬の森の3割は、戦後の拡大造林で一斉に植樹したスギ・ヒノキ等の人工林であり、現在伐期を迎えている。これらの針葉樹は、林業事業者が大型の林業機械を用いて、効率的に伐採・搬出し、対馬の産業としての成長を支えており、今後20年くらいは継続される見込みである。しかし、6-7割を占める広葉樹（天然林）は、しいたけ原木や薪の利用が僅かにあるものの、放置されている。広葉樹は伐木も針葉樹ほど容易ではなく、尾根や標高の高い場所にあることが多いため搬出も難しいため、林業事業者は、ほとんどが利用されておらず、非経済林と認識している。そのため、誰も手を入れず、鹿の被害もあり、非常に荒廃している。広葉樹林は、木材以外のさまざまな生態系サービスを有し、希少な生き物たちの生息地として重要であるため、適切な保全活動や持続可能な利用を図ることで、人とヤマネコたちにとって重要な地域資源となる。また、対馬は、7割が個人所有の民有林であり、木材の価格が下がったことにより、森がお金にならないという認識が広がり、所有者は管理を放棄し、次世代への継承も滞っている場合が多く、不在地主の森が増え、荒れた森が多くなっている原因の一つである。今後、対馬市での新しい森林管理システムが導入され、それらの森が市有林化されたとしても、対馬市の財源で管理できる森は限られており、100年後の対馬の森の行く末が非常に危ぶまれている。森林は、本質的には「個人所有」のものではなく、公益性の高い貴重な地域資源である。今こそ、対馬の子非経済林と言われている森を共有地化して、能力ややる気のある多様な人材が森づくりの担い手となって、森との関係性を再構築し、森づくりを進めていく必要がある。実際に、地域づくりや起業、新しいビジネス、副業、趣味で森を使いたいと考える若者は対馬にも多くいるが、使える森がないために、行動に移す人は、木工品を扱う職人くらいである。そこで、地主と行政、担い手を繋いで、非経済林と言われる「広葉樹の森」の保全と持続可能な利用を推進するための仕組み（プラットフォームや制度）が必要である。本事業では、人とヤマネコが共生する森づくりを目指して、トラヤマの杜を登録、増設していき、多様な主体（行政・民間・個人）が森林という「場」を共有し、連携しながら森づくりの実践的で横断的なプロジェクトを進めていくための仕組み-協同組合-を設立する事業である。

事業の骨子		現時点で想定される課題・ボトルネック
①ありたい未来	ツシマヤマネコをはじめとする希少な生物たちと人の暮らしが共生する豊かな対馬の森林として、対馬の森の30%が共有地・保護区として認定され、多様な森づくりの担い手（ツシマモリト）が創意工夫して森林の保全と持続可能な利用を行い、対馬の地域経済の好循環と森林生態系の回復、そして人々の暮らしの豊かさが増加している。	3者をつなぐ組織や仕組みがないために、広葉樹の森は、放置され、荒廃しつつある。今後さらに対馬に人がいなくなり、行政の予算が減少し、森林は保全や利用価値のない負の遺産として対馬の89%を占めることが容易に想像できる。3者をつなぐ組織や仕組みを作ることが、森づくりの一步となる。ツシマモリト協同組合の運営費は、組合員の会費や行政からの森林管理や調査の委託費、寄付（ヤマネコ基金、森林環境贈与税）、自主事業（ブランド化した林産物やツーリズムの提供）などを想定しているが、実際に人件費を毎年確保できるほどの収益性があるかどうかは現時点では判断できない。事業を展開していく中で、新たな資金源やビジネスモデルも生まれていくと期待している。
②課題	ツシマモリトが活動を行う場所がなく、個人所有者は森林を放置しており、行政も限られた予算やパワーの中で広葉樹等の林業事業者が対象としない森林の保全と持続可能な利用の施策や事業をほとんど実施できていない。3者を有機的に繋ぐ組織や仕組みも存在していない。	
③なぜこの事業をやるのか（Why）	誰も見向きもしないが、対馬の土地の60-70%を占め、無限の可能性を有する非経済林を「トラヤマの杜」として認定し、多様な主体による森林づくり促進の仕組みを作ることで、上記のありたい未来に向けた課題解決につながると考えている。	
④地域資源	放置された森林がたくさんあり、森林組合などが利用しにくい非経済林が多く、存在する。それは、見方を変えれば、無限の価値がある宝の山である。また、地域で活躍する人的資源（副業ができる人を含む）は豊富に存在し、今後の仕組みづくりによって、島外からの若手移住者や事業者も参画できるようになる。そういった人的資源が活用できる森林があれば、創意工夫によってさまざま活動やビジネスが生まれていくことが期待でき、森林資源の具体的な価値も見えていくようになる。	

<p>⑤商品・サービスの具体的な内容 (What)</p>	<p>「トラヤマの杜」を認定し、多様なツシモリビトに活用を提供する仕組み（ツシモリビト協同組合）を構築する。ツシモリビト協同組合では、行政と連携して、新しい森林管理システムの推進を支援し、自身の森を管理してほしい地主との調整・交渉して、非経済林を「トラヤマの杜」に認定する。地主と管理委託契約を結び、その場所の情報を一元的にGIS等で把握し、その森の最低な保全・利用計画を作る。その計画をもとに、協同組合の組合員に情報提供し、各組合員（ツシモリビト）が、環境保全に資する範囲での森の活用を展開していく。その取り組みの効果を研究者などと連携してモニタリングを行い評価し、保全・管理計画を改善していく。また、トラヤマの杜は、日本ナショナルトラスト協会の認定を受けてトラスト化して、保護区に登録していく。保護区で生み出された商品・サービスをトラヤマの杜認定商品・サービスとしてブランド化し、ヤマネコ保全や環境保全に貢献したい商品者に付加価値をつけて販売したり、寄付を募ることで、活動資金を得る。トラヤマの杜の面積を増やしていき、活動の輪を広げていき、対馬全体の非経済林をゾーニングしていき、対馬全体をユネスコエコパークにも登録していく動きを作る。</p>	
<p>⑥担い手 (Who)</p>	<p>ツシモリビト協同組合を立ち上げるにあたっては、その前身の組織であるツシモリビト協議会（メンバー対馬木材産業、MIT）が、対馬市や長崎県、環境省等の行政や日本ナショナルトラスト協会と協議を進めて、組織の立ち上げを行う。今後、ともに仕組みを作っていくパートナーは増やしていくが、円滑に動けるように、少人数精鋭の組織づくりを図る。事務局はMITが担うことを想定しているが、そのための専門性を有する人材も確保・育成していく。また、ツシモリビトとして組合員となる人材・組織（自伐型林業の実践者、猟友会、観光協会、ハチミツ部会、森づくりに関わりたい市民、森林のエコツーリズムを考えている人材等）にも参加を要請して、パートナーシップを構築していく。</p>	<p>課題・ボトルネックを乗り越えるために力を借りたい人物・企業像</p>
<p>⑦事業で生じる循環</p>	<p>ツシモリビト協同組合が立ち上がり、トラヤマの杜や、そこで活躍するツシモリビトが増えることで、様々な森づくりの実践が生まれていく。それらの実践は、有機的に繋がっていき、ヤマネコをはじめとする希少な生き物の生息地も守られていく。森林が保全されていけば、森林生態系サービスが向上し、公益的な地域資源が増え、気候変動や水環境の保全（浄化や涵養）、磯焼けの問題等多様な対馬の課題解決にもつながっていく。豊かな森林環境を取り戻すことで、人々の豊かさも増え、対馬の創生にもつながっていくことも期待できる。</p>	<p>仕組みを作るためには、行政をはじめとする関係者の理解と支援が必要である。本事業で期待される効果をしっかりと土地所有者にも伝えて、理解してもらい、土地をトラヤマの杜に登録してくれる動きを作っていく必要がある。また、ツシモリビトは、島内の担い手に限らず、島外企業からの参加も歓迎したいので、そういった対馬の森づくりに参加したい事業者を募っていききたい。森林保全の取り組みを実践するノウハウを持つ島外の専門家や組織からトラヤマの杜の整備の方向性などにアドバイスをもらいたい。</p>
<p>⑧事業で生じる成果</p>	<p>対馬の非経済林が、公益性の高い有益な資源であるという認識が広まり、行政もそこに予算を投じるようになるし、森に関わりを持つ市民や事業者が増えていけば、森を守る行動が浸透していき、結果的に有害鳥獣対策も進むようになる。ヤマネコの保全に資する取り組みとして世の中に認知されていけば、活動資金もより集まるようになっていき、そこで生み出された商品やサービスに付加価値もついていく。現在は、有害鳥獣対策が目的になってしまっているが、本来であれば、森の保全と持続可能な利用のための手段として有害鳥獣対策を行うものであり、ツシモリビトが対策に参加するようになっていき、シカの個体数管理にも解決の兆しがみえるようになる。</p>	



事業名称2：ESD×レスポンシブル・ツーリズムの推進によるツシマモリビトの確保と育成（ひとづくり）

あらすじ

ESD×レスポンシブル・ツーリズムの視点で、ツシマモリト協同組合が推進するトラヤマの杜での活動に取り組む担い手（ツシマモリト）の確保と育成する事業を展開することで、対馬の森林生態系保全と持続可能な利用に資する活動を多主体が推進し、人とヤマネコが共生するしまづくりを目指す。

ストーリー

89%が森林の対馬において、生活様式の変化や経済的な理由から、森に関わる市民が非常に少なくなっている中で、森に関心を持ち、森での活動を行い、森の恵みを持続可能な形で享受する担い手を確保、育成することで、森と人とのつながりを再構築し、対馬の暮らしの豊かさを取り戻していきたい。現在対馬で森に関わるのは、林業を生業としている林家や有害鳥獣対策に取り組む猟師に限られているが、潜在的には森での山菜の採集や森あそび、トレッキング、バードウォッチング、研究・教育活動等を行う人など、多岐にわたるはずである。人と森とのつながりを再構築するための事業として、ツシマモリト協同組合が推進するトラヤマの杜の仕組みづくりを進めるが、そこでの活動に取り組む人材（ツシマモリト）の確保と育成も合わせて推進する必要がある。特に、森づくりは樹木の成長が10年単位で考えるべき長期的なものであるため、次世代の育成（学校教育でのカリキュラムの導入）も今から取り組む必要がある。加えて、生業として林業に関わりのない対馬の市民（漁師や公務員、農家、一般企業のサラリーマン、事務員等）も、森での活動が気軽にできる場や機会があれば、ツシマモリトになりうる。それ以外にも、島外からの移住者や島外在住の観光客、島内外の企業も、対馬の豊かな森林資源を有効活用する場や機会があれば、ツシマモリトになりうる。こういったツシマモリト候補者の掘り起こしを目的として、学校教育の総合学習での森づくりに関するESDの推進や、観光客や対馬市民に向けたレスポンシブル・ツーリズムの推進、さらにはそれらを組み合わせたスタディツアーの実施により、ツシマモリトの確保と育成を推進する。なお、学びの舞台は、トラヤマの杜各地を想定している。

事業の骨子		現時点で想定される課題・ボトルネック
①ありたい未来	ツシマヤマネコをはじめとする希少な生物たちと人の暮らしが共生する豊かな対馬の森林として、対馬の森の30%が共有地・保護区として認定され、多様な森づくりの担い手（ツシマモリト）が創意工夫して森林の保全と持続可能な利用を行い、対馬の地域経済の好循環と森林生態系の回復、そして人々の暮らしの豊かさが増加している。市民一人ひとりが、対馬の森を愛し、森を守るツシマモリトになっている。長期的には、森づくり（森里海づくり・SDGs）の担い手を育成する専門学校の立ち上げも視野に入れていきたい。	教育コンテンツを企画し、提供し、多様なステークホルダーを繋ぐ地域コーディネーターが活動するための費用がない。レスポンシブルツーリズムも、これから導入していきたいと考えているため、その準備にかかる人件費などの費用が足りない。学校教育には、そういったコーディネーターに対する予算がほとんどないし、ビジネスとして成り立つものではないが、非常に重要な取り組みであるため、何とか予算をどこからか確保して、事業化していく必要がある。その有用性が認められていけば、ツーリズムやESDの推進において資金が集まってくると考えている。
②課題	89%が森林の対馬において、生活様式の変化や経済的な理由から、森に関わる市民が非常に少ない。森に関心を持ち、森での活動を行い、森の恵みを持続可能な形で享受する担い手を確保、育成することで、森と人とのつながりを再構築し、対馬の暮らしの豊かさを取り戻していきたい。そのための方法が現在ほとんどないため、最初のステップとして、学校での総合学習や観光（学びのツーリズム）に絡めた形でのカリキュラムを組み立てていく必要がある。現在それを推し進める組織やネットワークが対馬にはなく、MITで本事業で取り組みを始めたところである。今後は、ツシマモリト協同組合が、トラヤマの杜での学びのコンテンツを作り、市民や学生、観光客に学びの場を提供し、ツシマモリトの候補を発掘していく必要性を感じている。	
③なぜこの事業をやるのか（Why）	対馬は元々、森里海の恵みを受けながら、自然とともに暮らしてきた持続可能な暮らしがあったが、現代の経済至上主義の波に飲み込まれて、島外からの安価なものをお金で購入するように暮らしが劇的に変化した。そのため、森から恵みを得ることをしなくなり、森との関わりが希薄化してしまっている。その結果、森は放置され、鹿が増え、森林環境が劣化していることにも起因している。対馬の豊かさの源泉にある自然との関わりを再構築することは、森づくりに留まらず、対馬の創生や人々の暮らしのあり方を見直し、持続可能な島づくりを推進するためのも必要である。ちょっとしたことで良いので、森との関わりを取り戻すことが大事であり、そのため学びの場を作ることが大事である。そのきっかけによって、ツシマモリトになる人材が増えていくと考えている。	
④地域資源	教育の現場は、トラヤマの杜を想定している。今後、ツシマモリト協同組合がトラヤマの杜を増やしていき、そこでの森林整備や森づくりが進むことが期待できる。学びのコンテンツを提供する人材は、林業に関わる人や組織、観光事業に関わる人や組織、そして、森づくりに取り組むツシマモリトである。対馬の森林の多様な機能や資源を活用した学びのコンテンツを無限に生み出すことが期待できる。	

<p>⑤商品・サービスの具体的な内容 (What)</p>	<p>学校での総合学習では、ツシモリビト協同組合からの森に関する講義を行い、近くにあるトラヤマの杜を案内し現場を見てもらった上で、生徒たちに森の活用などに関するワークショップを行う。適宜、ツシモリビトの方々から、現場での説明や体験の提供を受け、トラヤマの杜にある資源を活用した企画をとりまとめ、ツシモリビトに発表する。実現可能性の高い企画については、ツシモリビトと共同で事業を実施する。</p> <p>レスポンスブル・ツーリズムとは、観光客が自身を「ツーリズムを構成する重要要素の一つ」と捉え、責任ある観光を通じて、よりよい観光地をつくり上げようという動きである。対馬の森が抱える問題を知り、自分たちができることを考え、実践するようなスタディーツアーをツシモリビト協同組合が提供する。また、トラヤマの杜でのトレッキングや生き物調査、森林整備体験、キャンプ、癒し体験、自然学習などの様々なプログラムを用意し、提供する。対馬の磯焼けの原因になっており、駆除しているアイゴ（ハリ）や森を荒らすシカ・イノシシの捕獲体験も行うとともに、加工品（一夜干し等）をトラヤマの杜のキャンプスペースで、スウェーデントーチで火を起こし、対馬の燻製用チップ（ヤマザクラなど）で燻製を作り食べる体験などを具体的に考えている。有害鳥獣被害対策として柵の設置や囲いの中での多頭捕獲に立ち会うことも学びになる。</p>	
<p>⑥担い手 (Who)</p>	<p>今年度、MITでは対馬の4校の中学校での総合学習のカリキュラム作りや授業の運営に関わり、実績や経験を積んだ。カリキュラムでは、森づくりや持続可能性、職業に焦点を当てた内容になっている。また本年度は、厚生労働省からの林業就業支援講習とも連動させて、対馬での林業研修の企画・運営を行ったり、自主事業として森に関する体験（蜂蜜・しいたけ・ゆずの収穫体験）もこれまでに提供してきている。対馬市の域学連携事業では、MITはこれまでに全国の大学生の受入や指導・コーディネートの実績もあり、対馬市の農林水産業インターンのコーディネーターにもなっている。今年から代表が対馬観光物産協会の理事に就任し、観光事業にも参入しており、森のスタディーツアーの企画もツシモリビト協議会で検討中である。MITが事務局を担うツシモリビト協同組合が立ち上げられ、当組合が教育コンテンツを提供する中心的な担い手となり、観光物産協会や対馬グリーンブルーツーリズム協会、林業事業者などとの連携により、多様なコンテンツを生み出し、提供していく。</p>	<p>課題・ボトルネックを乗り越えるために力を借りたい人物・企業像</p>
<p>⑦事業で生じる循環</p>	<p>当事業によって、ツシモリビトが増えていくことで、そのモリビトたちが、森の語り部になり、他の人たちをモリビトにいざなって動きが自然とできてくると期待している。また、対馬にきた観光客が、森の魅力に取り憑かれ、対馬にレポートして、ツシモリビトになっていく。ツシモリビトが増えるほど、互いが相互作用を誘発し、さまざまな事業や活動に展開していく。次世代のツシモリビトも育まれていく人の循環が生まれていく。</p>	<p>大学の力を借りたい。大学は現場を欲しているし、対馬側は、教育ができる人材を欲している。お互いがwin-winになる仕組みを、ツシモリビト協同組合が作り出していき、大学との連携を強化して、教育の質を向上させていく。</p>
<p>⑧事業で生じる成果</p>	<p>ESD×レスポンスブル・ツーリズムの推進により、ツシモリビトが島内外に増えていくことで、人と森との関係性が再構築され、森林資源の保全と持続可能な利用も促進され、森が健全な状態になっていくと期待している。この対馬モデルは、日本全国の放置された里山地域でも展開ができるものであり、森の島日本の地域再生や日本人の豊かさを高めていくこと、自然共生社会の実現にも貢献していきたい。</p>	



**事業名称3：トラヤマの杜における多様な森林資源の高付加価値化に向けたビジネスモデルの構築（なりわいづくり）**

あらすじ

トラヤマの杜において得られた森林資源（商品やサービス）の付加価値を高め、持続可能な形でトラヤマの杜での活動ができるように、トラヤマの杜認定制度を設ける。ツシマモリト協同組合の組合員が、多様な森林資源を有効活用するためのビジネスモデルを関係者と構築し、具体的な事業を展開し、地域経済を回すとともに、森林の保全と持続可能な利用の原動力を創出する。なお、トラヤマの杜は、非経済林であり、保護区としての属性を有するため、原則として大きな収益を生むビジネスモデルは想定しておらず、ツシマモリトが楽しく活動が続ける（趣味や豊かさの向上）上で必要な資金を得られる程度の収益を生み出すような事業を想定している。ただし、希少性など売りにすることで、大きな利益を生む可能性も秘めている。

ストーリー

対馬では森林資源の活用として、木材（希少な樹種や部位を用いた建築材や家具、薪・炭等）や木工品、ジビエ、原木しいたけ、はちみつ、山菜等があるが、それ以外にも、エコツーリズム、エッセンシャルオイル、メープルシロップ、燻製用チップ、椿油、山茶、自然薯、天然のキノコ類等、様々な利用価値の高い産物やサービスが多く眠っている。また、家具や木工品については、現在の顧客ニーズから考えて、さらに担い手（職人）を増やしていくことで、地域の雇用を生み出す産業の一つになると期待できる。森を荒らすシカ・イノシシの捕獲についても、トラヤマの杜を囲った柵の中で、一斉捕獲（多頭捕獲）を行うことで、有害鳥獣対策とジビエの活用を促進していく。こういった産品やサービスにさらに付加価値をつけるために、ツシマヤマネコとの共生を目指した場で作られたストーリーを全面に打ち出した「トラヤマの杜 認証制度」を確立していき、観光客や島外のヤマネコファン、対馬市民に販売していく。なお、ツシマヤマネコが利用する田んぼで作られた減農薬の米（佐護ツシマヤマネコ米：事務局MIT）は、通常の2倍の価格で販売され、年間18tの販売実績を有しており、ツシマヤマネコ保全に資する取り組みは全国からも注目され、ファンも多く、このようなブランド認証制度は、当事業でも有効であると期待している。

事業の骨子

現時点で想定される  
課題・ボトルネック

①ありたい未来	ツシマヤマネコをはじめとする希少な生物たちと人の暮らしが共生する豊かな対馬の森林として、対馬の森の30%が共有地・保護区として認定され、多様な森づくりの担い手（ツシマモリト）が創意工夫して森林の保全と持続可能な利用を行い、対馬の地域経済の好循環と森林生態系の回復、そして人々の暮らしの豊かさが増加している。ツシマモリトが森林資源を有効にかつ高付加価値をつけて販売する出口が増えることで、対馬の森に関わる産業やビジネス、趣味や交流の機会を新たに生まれ、森林資源を活用した地域経済の好循環と森林生態系の回復が図られている。	自由に活用できるトラヤマの杜の確保と、参加できる仕組み（協同組合）づくり、そして担い手の育成が必要。また、トラヤマの杜認証制度の信頼性を高めるためには、認証機関としての行政機関などとの連携も必要になってくる。
②課題	対馬において、森林資源を活用した生業は、林業、薪製造、しいたけ栽培、家具づくり、建築等であるが、一部を除き、高付加価値化が進んでおらず、安価で取引されている状況である。対馬市民や事業者は、森林資源を活用するという視点がなく、活用できる場も少ないため、森林で何か新しいことを生み出していき発想もない。家具職人や木工職人も限られており、豊富にある森林資源を活用したビジネスを展開する事業者も少なく、趣味などで森林資源を活用する人も多くない。トラヤマの杜が増え、その中で、環境に配慮した形で森林資源を活用できる場や機会が増えることで、そういった人材（ツシマモリト）が増え、新たに生み出される産品やサービスが増えていくと期待できる。また、そこで作られた産品やサービスに付加価値をつけていく仕組み（認証制度）も現在は存在していない。	
③なぜこの事業をやるのか（Why）	対馬の森林の価値を市民や事業者が認識して、森林を保全しながら、有効活用していくためには、様々な利活用・出口を見出していく必要がある。ツシマモリト協同組合がトラヤマの杜を確保していき、そこで得られた産品やサービスをツシマモリト等と連携して販売していくことで、対馬の森を活用したビジネスやレクリエーションの場が生まれていく。	
④地域資源	トラヤマの杜から得られる各種樹木や植物、空間が地域資源となる。今後、ツシマモリト協同組合がトラヤマの杜を増やしていき、そこでの森林整備や森づくりが進むことが期待できる。産品の製造を行う人材は、林業に関わる人や組織、観光事業に関わる人や組織、そして、森づくりに取り組むツシマモリトである。対馬の森林の多様な機能や資源を活用した産品は無限に生み出すことが期待できる。	

<p>⑤商品・サービスの具体的な内容 (What)</p>	<p>木材（希少な樹種や部位を用いた建築材や家具、薪・炭等）や木工品、シビ工、原木しいたけ、はちみつ、山菜等があるが、それ以外にも、エコツーリズム、エッセンシャルオイル、メープルシロップ、燻製用チップ、椿油、山茶、自然薯、天然のキノコ類等、様々な利用価値の高い産物やサービス。それらをトラヤマの杜認証制度によって高付加価値を高めていく。</p>	
<p>⑥担い手 (Who)</p>	<p>ツシマモリピト協同組合やツシマモリピトたち。今年度は、メープルシロップを対馬のカエデやモミジから抽出し、見事に成功した人材もいる。MITでは、高性能のレーザー刻印機を所持する五島市奈留島の三兄弟工房に委託して、対馬材で用いて対馬の職人が製作したコースターやしおり、お盆などにヤマネコのデザインを付した商品を販売し、売れ行きも好調である。こういったノウハウを有するMITでは、今後さらに付加価値の高い対馬の木製の産物をデザイン・販売していく予定である。そのようなノウハウをツシマモリピト協同組合にも提供していき、ツシマモリピトたちの作品を世の中に出していく。</p>	<p>課題・ボトルネックを乗り越えるために力を借りたい人物・企業像</p>
<p>⑦事業で生じる循環</p>	<p>トラヤマの杜における森林資源の有効活用によって、地域内での生産と消費の循環を構築できる。また、対馬の森林資源をテーマにして、生産者から加工業者、販売業者、消費者のつながり・循環の輪を作ることができる。</p>	<p>森林資源を活用するための技術開発に取り組む企業とも連携していきたい。対馬の地域資源を地産地消する仕組みが弱いと、例えば小型のバイオマス発電の施設導入やログハウスの建設ノウハウがある事業者などと連携できると良い。</p>
<p>⑧事業で生じる成果</p>	<p>対馬市の産業の一つとして森林資源を有効活用した多種多様なビジネスが生まれることで、雇用が創出され、島の活性化にも寄与する。商材が対馬内で販売・消費されることで市民の森への関心が高まり、森づくりに関わる人も増えていくと期待できる。対馬には子どもたちが遊ぶ場所が少ないという保護者からの指摘がある。かつては、里山が子どもたちの遊び場だったが、今は危険な場所とされている。整備された森林があれば、子どもたちの遊び場になり、大人たちの憩いの場にもなっていく。森林の価値は、ビジネスだけでは測れないものである。当事業では、なりわいとしての林産物の高付加価値化に着目しているが、それ以外の社会的・環境的な価値も、モリピトの活動によって掘り起こされていくことを期待している。</p>	<p>また、有害鳥獣対策としてトラヤマの杜での多頭捕獲を行う仕掛け（罠）を導入できる事業者の協力を得たい。</p>